WASON
HQ
1104
J74+

July 1893
no. 348

明治廿六年七月八日發兌

女學雜誌

第三百四十八號

女學雜誌社

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.
(JOGAKU ZASSHI.)

本號目録

隨感
年齒三十の人の述懐○春こそさびしけれ○戀は男女の間に限る可らず○勇者の涙

史傳
女傑、女傑を評傳す（ウイラードがソマーセットに對する評）

摘要
女子と政治○チベットの婚姻○日本の家族制

理學
七夕（けい子）

兒籃
黄金機會（しづ子）

小説
春風裡（不知庵主人譯）

雜錄
母の別れ（ひさご女史）○儉約の覺悟○大博覽會特別通信

家政
子供につきて（しづ子）○手製ラムネ○田家のこよみ

女報

前號目録

社說
世界大博覽會と十九世紀の婦人（第一、婦人館○第二、婦人會○第三、四百年前來万國婦人の進歩○第四、五、六、各種の會合○第七、結論）○（すべて、六頁の細密なる長說話）

書架
下田歌子家政學○末松謙澄氏修身女訓○簡易園藝法

家政
小言のいひ樣（しづ子）

理學
つゆ（けい子）

小說
春風裡（トオストイ伯著、不知庵主人、譯）

兒籃
三階にお住ひなされまし（しづ子）

摘要
泥棒に金持なし○相撲幕の内給金表

開書
夫婦別居の事に付て（本鄕の一女子）

史傳
雲松庵村田多年女史○西周、福羽美靜兩氏書狀

通信
宮城縣通信○大阪通信○三重縣通信

女報
數十件

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

第三百四十八號

明治二十六年七月八日發

隨感

○年齒三十の人の述懷

昨日は今日の昔しにて、はかなくのみ過にすぎゆく世の中を、つく〴〵と思へば、哀れ我世も幾程ぞや、手を折りて數ふれば早や三十路にもあまりにけり。と、むかし、宣長が懷を述べたる歎き、今また我の思ひとはなりぬ。蒲衣が八才にして舜の師となり、王勃十三にして滕王閣の序を作れるなどは、例外とするも、周公瑾が二十四にして、中原を經略し、孔明が廿七にして、三分の偉畧を立てたるなど、みな今年の我に先だつこと、既に三歳もしくは更に其倍數にはあらずや。此他、青史に鑑みるときは、俊才雲の如く、少年偉人星の如し。ウイリアム、ピットが英國の大藏大臣となりたる、ロード、バイロンが、歐洲第一流の詩人となりたる、大王アレキサンダーが四方を征畧し大帝國を建立して而して驕然として眠りたる、皆な二十三才の期なり。武に在ては、ハンニバル、シャーレマン、ナポーレヲン。文に在ては、ヒウム、ライプニッツ、パスカル。傳道に在ては、リビンストン、チャルモウス、ルーテル、皆これ、少年にして全世界を聳動せしめたるの人々なりとす。われ、之を懷ふて、恥あり、世に生き存らふべき齡を算し、現に有する藝能を量り、目前に夥たゞしき義務を觀じて、自から歎惜すると數ばなりとす。然りと雖ども、われ、初めて「世」と云へるものを見、之に入り之に接してより此の方、僅かに十年、今後まさに生きんとする三四十年に較ぶるときは、尚ほ極めて僅少なりとす、魯迂短才の質も、此の十年が間だに、多くの經驗を得たることを思ふときは、將來の三四十年こそ樂しみなれ。世を歩むこと一歩一歩、歩々新景色を見て、感ずること切りなり。一段は、一段より、面白く、一事は、一事よりも味深し。獨身の我は、室家ある我を知ること能はず。室家ありて愛兒なき我は、親としての我を知ること能はず。人世、一事を增して、更に一事の理現はる。此を以て、患難には、患難の教あり、憂苦には、憂苦の賜物あり。

佐久間象山獄にありて、自から慰さめて曰く、
吾、此の境を履まざれば、此醒覺なし、一跌を經て一知を長ずとは、果して虛語に非ず。古人云く、閒居するも其に日月を空過せず、彼の我を錮するもの皆我を成す也。
もし此般の覺悟を以て世に立たば、際會する所ろ、一事として、吾が靈の益にあらざるとなし。我は、シバの女王の如く、眞理を愛せん。ソロモンが智を慕へるが如く、道を慕はん。日々に此の心を以て人生の行路を進まば、患難にも喜樂あり、せん方つくる處、尙ほ望わらんとす。之を此れ、"Singing in Journey" 歌吟行路とは申すべけれ。この念を以て、こし方ゆく末を思へば、われ等が、年齡を過し又た重ぬるは、極めて、有望の事なりと感じける。

〇春こそさびしけれ

なか／＼に人に語り明さんとの難くして、思ひを孤獨の胸の内に潛め、うつり行く四時の景色に、覺束なき慰さめを尋ね、飛雲流水を侶として、切なる情を非情の事物に寓する時ぞ、人は心細けれ。さても、此の心細きは、さびしき方にこそ幾分の慰さめを得るなれ、雜々しくして喧ましき時には、最と更に心細く感じて、殆んど絕え入らまくほつするものなり。左れば、心のさびしき時は、景色のさびしきこそ、其同情なれ、之を、さびしさのにぎわしさとは云ふ。譬へば、わが泣きは、人の涙によりて、幾分の安慰を得、人の笑によりて、ます／＼悲しきが如きか。この故に、眞とに心細ふして、人知れぬ切なる情けに思ひしめつゝある身にとりては、秋の物がなしう、さびれたるこそ、せめても心やりなれ。淺はかに狂ひ、うかれたわぶるゝ花の春の景色は、反ッて一層の憂悶の種とはならんとす。白川の少將、此心をよみて、

をぎの葉の身にしむよりも春風の
花にこゝろなきゆふぐれの庭

〇戀は男女の間に限る可らず

「戀愛の德を想ふ」と云へば、たゞ男女の間柄の事をのみ言ふと、思ふ人多きこそ、うたてけれ。かなしき哉、此の宏ひにして、聖なる德、わづかに、男、女のかたらひの情とのみ、誤まられて、而も、其情に、潔よき想を寄せられず。不遇の甚しき、此のものゝ如きは少なしとぞ言べき。むかし、藤原の芳樹翁は寄居歌談中に言へり、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

古今集に戀の部をたてゝ男女のあひ思ひをかはす歌をむねと入られしより、世の人戀と云へばかならず男女のあはひにのみいふ事のやうに覺えたれど、さしもあるまじく也。子の親を戀ひ、親の子を戀ひ、弟の兄を戀ひ、兄の弟を戀ひ、あるは友どちかたみに戀ひ慕ひあへるなどをも、などかは戀といはざらん。されば、万葉集には女夫の中らひなるをば、相聞と題して戀といふ名をあげられず。但だ男女の慕ひあへるをば戀とは言はじと頑くなに思はんは宜しからず、之もとより戀なれど、之のみを戀といふぞと心得んはひが事なるべし。同集に、あすか川かは淀さらずたつ霧のおもひ過べき孤悲にあらなくに、と山部赤人の神岳にのぼりて明日香の舊都をこひてよめる。拾遺戀部に、なくなみだ世はみな海となりななん同じ渚にながれよるべく、と善裕法師が流罪を悲みて其母のよめるなどは、いにしへを戀ひ、子を戀へる歌どもなり。此たぐひなほ求めなば多かるべし。おほかた世の中は、此の戀と云ふ一文字にて立つものなりけり。そはいかにと言はんに、親は子を戀ひて常に撫でいつくしまんと思ひ、子は親を戀ひて常にたがはで養はんと思ふ、之にいさゝかもうきふし見えたらん時は、親子の親しみ失せつべし、夫婦朋友もまた皆なかゝり。されば、此戀といふ言葉だに思ひたがへずば、世の中安からぬべくこそ。俊成三位の、戀せずば人は心もなからまじものゝあはれは之よりぞ知る、とよみ玉へるは、よく戀のそこひを言ひつくし玉へるものなり。

○勇者の涙

武人の涙もろく、俠者の情を含むを見て、あやしとする人の心こそ、いと奇しけれ。武人が、大刀うち振りて人の首べを草の如く苅るは、血を嘗めんとの慘酷にはあらず、別に忍びざる所の情ありて、之に激すればなり。俠者が、一たんの義氣に、熱意勃發し、骨を原頭にさらし、肉を野狼に投じて、尙ほ微笑するものは、其衷心、外に人を想ふとの切なるものあれば也。むかし、佐野の城主天徳寺、琵琶法師を招きて、宇治川、與一の二曲を語らせ、涙泫然としてとゞめあへず、雨しづくをぞ流しける。家臣ども之を見て不審とし、問ひ申すよう、前後二曲ともに勇烈なる事にて憐れなる方は少しも

候はぬに、君には御感涙に咽ばれて候、是は何如の事にて候やと。天徳寺、此あやしみをあやしみ、太たく驚ろきて言へり、只今迄は各々を頼もしく思ひ候ひしが、今の一言にて、扨々力を落して候、高綱は、自から若し宇治川を先陣せずして人に先をこされなば、必らず打死して再び歸るまじきとて、頼朝に暇乞して出でたり、與一は、源平兩家鳴りをしづめて見物する間に馬乘出し、もし射損じなば御方の名折たるべし、馬上にて腹かき切りて海に入らんと覺悟したり、此等の心を察する時は、我安くんぞ涙なきことを得ん、武士の道ほど哀なるものは候はずと答へけり。武人、俠者の行事を考ふるものは、此邊推心の情なかる可らず。此情を以て、彼の心を推せば、彼等が物に忍びずして、情に切まるの思、いと明らかに知らるゝなり。故に、駿台雜話の著者は曰く、武の一筋は仁に根ざして惻隱の心より發するに非ずや、仁より出ざるは眞の武に非ず、文道も武道も内より油然として潤ほひ渡りて發するに非ざれば、眞の物に非ず、これ人に情あり、物の哀を知るの心なり、すべて諸の言行共に義理に當りては、悉とく忍びざるの心より出でざる可らずと。

史傳

女傑、女傑を評傳す、

ウイラードがソマセット女史に對する評

五月分の「少婦人」雜誌に、フランセス、ウイラードがソマセット女史を評したる、いと面白き一篇をかゝぐ。

ソマセット女史の現在を有のまゝに描きたる一段に、

リーゲート邸内の大窓に倚りて平坦なる芝生が綠のうねうね遙か彼方の小山に續ける景色を眺むるは稍成熟に達したる一婦人にして、姿は聊か肥へたる方、質素ながら恰好申分なき黑絹の長衣を着し、上に白リボンの禁酒標を附したるは、女史が此改革事業に熱心なるを表せり。頭額よく身につり合ひ、柔和にして氣高き風情あり。髪は淡泊に束ねて寛優として思慮深きが如き額際に漲うち、弓なす眉は女史の感情深く、沈着なるを示し、茶色の眼ざしは時と場合に隨つて打興ぜるもあり、慨嘆するもあり、敏慧なるもあり、頰の薄紅を染たるは英國固有の壯健と女史の活潑なる

性を表し、鼻は高過ずして至つて品よく締り、唇の微笑は仁愛的の眼元と相映じて愛嬌あり。是を一言にすれば、全躰の面ざし英敏にして學ぶ處深く、仁愛に滿たる其人となりを示すに足る、是れソマセット女史の有のまゝなり。

　女史已れに語る聲を聞て大に悟る處あり

女史の生涯に一大變革を起したる事の元末を記したる件に、女史はある時懐疑的の傾きある書物を數多讀了したる後、偶然リーゲートなる柴生の大榎の影に息ひ居たる折しも、靈性の耳に囁ける一種の聲を認めたり、曰く「吾が子よ、吾が存在の如何を論ぜず、存在を信ずるものゝ如く勉めよ、さらば汝自らそを悟るに至るべし」と。女史は神靈の我が靈にかくも明らかに語を聞たるとなければ、大に審しみ、且悦び、今に至るまで人生の不可思議なる問題に樣々思ひを廻らしたりしを轉じて薔薇園に歩を進め、晴れ渡れる空に落陽まばゆき景色を詠めたりしに、こゝにも同樣以前の聲に接せり。姑らくして家に入り、倚端居して心に起したりし思想は言の葉に描く可くも非ざりし。强ひて言わんとし思はゞ詩人の嘗て言ひたる一句は聊かそを代表するに近かるべし。

さりとていとも愛す可きは人世なり、畏しと惶み、忍びにしのび」、女史は此時棚に久しく打捨たりし聖書を繙き、ヨハネ福音書を一過讀了せり。其夜は安らかに寢ね、翌朝に至りて女史は有りし事柄を朋友に語り、兼て企たりし暑中旅行も遊興も姑らく見合すべしといひたり。

　女史召されて禁酒事業に從事す。

數日を經て令息と共にイーストーア城に行き、數年間こゝに止まりて聖書を研究し、小作人の間に働けり。女史はこれより先父君の逝去されたるに付て讓り受たる領内の小民が困難せる一大原因は飲酒にあるとを發見し、こゝに禁酒の集會を開き、僕婢、隣人に先ちて禁酒會に加盟したれば、立ろに四十名のもの女史の例にならへりとなり。これこそ抑女史の禁酒事業の始めにして、これより續いて自らもし人を雇もして傳道に演説に近隣を風靡し、いよ〳〵其事業を擴張するに至りたり。

ウイラードは一言以て此一篇を完結せり。曰く暫時にしてかくまで事業を成効したる婦人は實に稀なり。天もし女史に年を假さば、英國民が男性にシヤフラスベレーを有つ如く女性にヘンレー、ソマーセットを有つの榮を得べしと。

摘要

○女子と政治

亞米利加政治雜誌の近號に、ベルバ、ロツクウード氏が「政治に於ける婦人」なる論文中に云く、

この數年間は、前に比類なき、進步を爲したり。學務委員撰擧の投票權を與へたる州二十四、市內撰擧の投票權を與へたるカンサス州、撰擧人投票の權を與へたるワイチミン州等ある外に、近頃その撰擧に於て、ミンニアポリス、チマハの二州にては、上院議員たるの候補者に、二人の婦人を擧たり、リース夫人、バートレツト夫人これなり。

女子が編輯せる新聞雜誌いよ〳〵廣く行れて、其意見文章、万千の讀者の心の中に、女性の技倆を實示し、又年々數千の敎育ある高等女學生を卒業せしむる女子大學あるとを思ふときは、女の地位が年ごとに進步するは决して奇しきことにあらず。

○チベツトの婚姻

著名の探險旅行者イサベラ、ビシヨツプ夫人が、チベツト國の婚姻の奇習を、「レーズア、アワー」雜誌の近號に於て記したるものゝうちに、

婚姻は、家の長男の特權にて之を行ひ、老父母之に關するとなく、大抵は別室に控へ居るなり、而して、妻は、長男を第一の良人とし、その弟をすべて第二の良人とす。故に、生れたる子は、長男を大父と稱し、其以下を小父とよぶ。故に、すべての妻には、皆な數人の夫あり、夫には、亦た數人の妻あるなり。クリスト數が、此國に入るとのかたき所以ん、實に此所に存す。婦人等は言へり、もしたゞ一人の良人あらんには、其死せしとき、寡婦とならざる可らず、これ悲しきとにあらずや、寧ろ初めより數人ありて、寡婦とならざるに若かずと。

○日本の家族制

倫敦ハノーバーに於て去月十二日開きたる「日本會」第八常集會に於て、鄉大五郞氏は、「日本の家族制」と云へる演說を爲し、父子、夫婦の關係を說き、日本の家族制も亦た「愛敬」の二つより成立てり、たゞ其度合の英米と異なるのみと言へり。くわしくは、ジヤパン、デイリー、ヘラルド新聞六月十日の附錄に見ゆれど、左して新らしきとなければ畧す。

理學

七夕

馨子

晝の炎熱も、凉風立つ夕暮に忘れ果てゝ、遣水の跡うるわしき前栽の翠色を、白やかなる浴衣に映しながら、年の頃八か九許りと見ゆる女の子、つく〳〵と澄み渡る空の色を眺め遣り、「お祖母さん、アラ何でせう、アノ帶のやうになつてるのは」。傍らに洋燈引寄せ、針仕事をなし居たる老婆は、今

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

の娘の聲を聞きて、眼鏡ごしに同じく空を眺めつゝ「帶とは何です、ア、あれかへ、あれはネ銀河といふものさ、私なんぞは、矢張銀河といふから、天にも河があるかと思つて居たら、お前のお父樣のお話しには、あれは何ですト、星の澤山集まつたんですト、娘「アラ、あれが星ッて、祖母さん、眞逆あんな星はありますまい、祖「でもさうですト、其の上アノ星はお日樣と同なじで、遠いからあんなに河のやうに見るるんですト、娘「さうですかネエ、私ア又帶かと思つて居たんですヨ、オホヽヽヽ、祖「さうですとも、私でさへ河と思つて居たんだもの、而して未だ空の色が、秋のやうに晴朗しないが、今日は幾日だらう、オヽそれ〳〵七月七日、今では七月七日といへば、忘れてもそれですむが、陰暦と陽暦の違ひこそあれ、今夜は七夕だ、娘「エ、七夕ッて何、祖「七夕とはネ、アノ星を祭るんですヨ、だから星祭ともいふの、昔は五節句と言つて、丁度今お前方が、學校がお休みだといつて樂しみにする大祭日と同なじさ、私がお前位の時分には、皆なが新調着物を着替へて遊んだものさ、娘「へーエそうですか、そうしてへ、お祖母さん、今朝學校へ行きがけに、竹と一所に、お清書の紙を買ひに、紙やへ寄たら、五色の紙の四角なのと、細長いのが、紙捻に貫して弔り下げてあつたから、竹に何んだつて問ひたの、竹がそれは七夕樣の紙だつて云ひましたが、あれを七夕樣がどうするのですか、祖「七夕樣はどうも仕ないが、あれを皆が買て來て、歌を書いたり、詩を書いたり、願ひ事を書いて、竹の葉に結びつけて上るの、其れから、まだ外にも紙で切つた網なんぞも上るし、紅白の吹流しだの、紙張りの硯、墨、筆、算盤、帳面、西瓜、なんぞ上るよ、だけれどこんなものを上るは、重に町家が多いの、士族の家では、机の上に五色の糸を卷いた環苧を飾つて、其四方に竹を立てヽ、其竹に五色の總模樣の綺麗な着物を、幾重も掛けるよ、それから、色紙や短冊に、七夕の歌を書いて上たり、又家に依ては新しい盥に水を汲で出して置て、牽牛織女と云ふ此の晩に銀河を渡る二ツの星を、寫して見る所もあるよ、娘「七夕の歌つて、どんなの、學校で歌ふ、蝶々の歌や、水車の歌とは違ひますか、祖「ヲホヽヽ違ひますのさ、七夕の歌はいろ〳〵あるが、お祖母さんの覺えて居るのは、アヽ何んとか云ふたつけ、暫く書ないものだから、皆忘れた、ソヲ〳〵

「一年を中に隔てゝおひみまく星の契りや思ひつきせぬ」と云ふのもあつたつけ、あとは皆な忘れました。姫「そんなに忘れると試驗に落第するよ、祖「ヲホヽヽ一言もないヨ、それから、昔は七夕を書くには、前日から硯や筆を洗つて置き、七日の朝は早や起きして、草木の葉の上に溜まつた露を、硯に集めとつて、七夕の歌を書くと、手跡が能くなるつて云ふて、お祖母さんなぞも早く起きて、お芋の葉の上の露なんぞを、集めて歩るいたことがあるのさ、姫「ソヲですかどうれで、お祖母さんは、私より少し、甘いやうだ、私も今度七夕を書いて見やうや、祖「ヲホヽヽ本統に正直だこと、小兒の話は面白いねエ、姫「お祖母さん、アノヲいつでも星は出て居るに、何故今夜ばかり星を祭るの、祖「それには、唐土から云ひ傳つてる、面白い話があるのさ、姫「談して頂戴な、ヲエお祖母さん、祖「七夕の夜に祭る星は、二ッあつて、一ッを織女、一ッを牽牛と云ふてね、織女の方は、天帝の娘で、機織の名人だそうです、それでね、毎日裝飾にも構はず、機ばかり織て居たそうです、或日父の天帝が、其精を出すに感心なされ、天河の西に居る、牽牛の所へ、織女をお嫁に遣りました、所が、お嫁にいつてから、惰けだして、機を織らなかつたそうです、其れでね、トヲト天帝の御機嫌を損ね、呼び返へされてしまつた、けれども、一年に一度、七月七日の夜ばかり、會ふことが出來ました、此牽牛と織女は天河を隔てゝ、西と東に居る故に、二ッの星が逢ふには、此の河を渡らなくつてはなりません、それだのに、若し雨が降ると、天河の水が増して、渡れなくなるのさ、姫「その時はどうするの、祖「その時はヲエ、鵲と云ふ鳥が飛で來て、銀河に鳥の橋を造つて、此の牽牛と織女を渡してあげるそうです、アノ百人首の歌に「かささぎの渡せる橋に置く霜の云々」とあるは此七夕の渡る橋から云ひ出したものと見へるよ、姫「ヲヤ何だかお可笑こと、星にも男や女が、あるのか知らむ、それに鳥が澤山並らんで、橋のやうに成るなんて、妙だこと、そんなことは、何だかうそらしいこと、だけれどヲ、隨分面白い談だ、アラお祖母さん、何だか光つたものが飛びましたよ、アラ〳〵もう見えなくなつてしまつた、早く見ないもんだから、今のは鵲に化けた、星でゝもあつたか知らむ、祖「ナアニ星が飛んだのだよ、流星だよ、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

兒藍

黄金機會（下續）完

しづ子

父は靜かに私を諭して、つまり此ごろの失策が私の稽古で、父の敎より母の諭しより私の爲になるのだから、よく心を沈めて考へる樣にと申されました。父の言葉を一々今覺へて居りませんが、たゞ一ッしつかりと私の心に留つたとがあり升、何かといふと、自分の弱味を知る時は即はち自分の强くなる時で、人は進歩しよふと思ふには一歩〱自修して行ねばならぬといふとです。父が話しをやめ升た時、私は嘆息をつき、

とうさま、モウ黄金機會も何もなくなつて、たつた此銅貨一ッになつちまひ升たよ。

其一錢でも眞心をもつてつかへば、決して馬鹿に出來ない好い結果があるかも知れんよ。

父は間もなく用事が出來て行つてしまひ、私も子供心に憂を長く覺へては居ず、椽先で手鞠をついて居り升た。暫らくする中に、時々母がものを惠んでやつた貧乏のおばあさんが門から這入つて來升たが、間もなく下女の聲ですげなく

御新さまはさつきお出かけで、まだお歸りはないよ、アー、いつお歸りになるかネー、分らないよ。

といふが聞へると、先のばあさんは力なさゝうにトボ〱元來た道を歸つて行く樣子でした。アヽ何かおつかさんに貰らひにでも來て、留守といふのに氣を落したのではないかと、フト私の心に浮んでは、巾着の一錢銅貨が急にやり度なり、考へ直す暇もなく椽を下りて、一ト走り、

ちよいと、おばあさん、お待なさいよ、これ………

とて手に載せて出したものを見て、老母は始めは驚いた樣子でしたが、軈て私がやらふといふのを氣づいたと見へて、ニツト、ほんの義理にホヽ笑の眞似をして

孃さん、ありがたう。

も、口の內で、又トボ〱家路さして歸り升た。何とと後へ來て見て居た下女は

可哀さうに、よくおやりなさい升たネ、あのばあさんは、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ぢいさんと一處におしだ救育院へやられつちまふんですとさ可哀さうに、

と繰かへして言つて居升た、私は漸やく一錢銅貨のつかひ處を見つけて、まづよかつたと安心した。ばあさんも氣の毒と思はないでも有ませんかつたが、別段久しくは覺へて居ず、其まゝ時を過ごし升た。

さてこれからどの位たち升たか、半月か一月もたつたとでしたらう、私は妹を連れて、のぶといふ守と一處に遊びに出升た。花を摘み、木苺をとりなどして、小半日もあちこちと遊び步き升て妹は草臥れたとて泣出し升たから、日影の草原へ腰かけて息んで居升と、間近に見へる草屋根の家から、ばあさんが古手桶を下げて出て參り升て、私どもの腰かけてる側の小川の中へ手桶を浸し、半分ほどはいつた水を重氣に持あげ升た。此時までもばあさんは私どものこゝに居るに氣つかず、私も格別氣を止めませんかつたが、のぶが急に聲をかけて、

オヤ、おとめさん、此節はおかわりも有ませんか、おぢいさんはどうし升た。

ア、ナニ、こねいだは大分好よ、ぢいさまもネ、この頃は又畑へ出て、アレあすこに、人の仕事してるとこで石ツころを拾わして貰つてまさあ。ハヽ、イヤ、ふたりともこねいだからいつにねい、笑らあこともあるんだ、アハヽヽ

あの、うちでもみんな悅んで居升たよ、おとめさん夫婦はとんだ仕合せだつてネ、御新さまなんども大へんと悅んでおいでなすつたよ。

どうも有がていこつてネ。

といひながらまだ何か話したそうに、手桶を川端へ置き、一本橋を渡つて私どもの側へ參り升た。のぶは丁寧に自分の腰掛た草を別けて老母を腰かけさせ升た、私は麥藁で螢籠を編んで居り升たから、兩人の話しを聞くとはなしに聞いて居り升た。のぶは好い話し合手を見つけたといふ調子で、

で、家賃も何もみんな拂へたつて本統ですか？芳さんなんて善い息子をお持ちなすつたのが何よりお仕合せですネ。

さうともネ、なんてい、有がていこつたか、おつかさんがよくしておくんなすつた恩は忘れませんてネ、よ、手紙へ

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

けいてよこしてさ、あの兒がネ、ほんとうに孝行だよ。

のぶは何故か此話しを一生懸命に聞いて居り升た。芳さんといつた壯年のヿは格別氣をとめて聞く譯のあつたヿはズットあらになつて私にも分り升た。此時もあらましは知つて居たらしい、其事柄を推して尋ね、

おとめさん、始めつからの話しをおきかせなさいな。話

さうともネ、あの日さ、御新さんとけへ行つた時ネ、どふもわたしもよつぽど困つてたのさ、なんて、氣持がわるかつたかよ、なんだつていふと、あの朝大家さまから使が來てネ、おめいら何年もこゝに居て氣の毒だか、さう〳〵店賃が滯つちやア困るから、どふも仕方がねい、あしたにも出てもれいてい、おれの方からねげひ出して救育院ていのへ遣つてやるつてネ、

のぶは此時

ほんとうにひどいネー、こんなに長く居た人たちを……

ばあさんはあたをつぎ、

それさ、わたしもあんまりだと思ふから、いつたのさ、御尤樣ですとネ、御尤樣にやア相違御ぜいませんけど、あの通りぢいさんも足が痛んで寐て居るもんで、今ちつと勘辨は出來升めいかつて、いつて見ても、中々いふヿを聞いて呉れるどこでない、ひでい權幕で、おめいらの樣なものへは一日も貸して置れねい、店賃計じやねい、あつちこつち借財があるさうだつていわつしやる、さういへばさうなんだが、わたしらあ茶だら一杯入れやしねい、儉約に儉約して暮らして居たんだからネ、

のぶはまた話しの腰を折つて、

いくら借ておいでなすつたんだネ？

そつちこつちで三兩二分もあつたかネ、それに店賃が三月分溜つて二兩と七〆さ。米やへは其前に拂ひして、藥料はやる、家にあ、からつきり一文もなかつたんだよ、食べるものといつたら一とかけらだつてなくつてさ。

のぶはまた

そこを助けたんだから芳さんもほんとうに孝行だネ、

さうとも、わたしの腹を痛めた兒じやアねいがネ、實の兒とおんなじと、可愛がつてそだつたから、をやぢよりわたしをこよしがるくらゐだよ。だが、あゝしてうちを出て人

につかわれて居るんだから、あの時分居どこが知れなくなつてチ、なほど困つたんだ。丁度あの日わたしも實困つちまつてよ、どふもするともなしだから、いつも最負にしておくんなはる御新さんにおはなしゝて、迚も大變なお金だからしよふがあるめいけど、たゞ可哀さうだつていつて貰つてもそれ丈も氣もちが好と思つてさ、

のぶは同情を感じたらしく

本にさうとも、氣の毒がつて貰ふ計りでも、嬉しいもんですからチ。

御新さんもお留守ださうで、むだ足して歸るとこをよ、この孃さんがひよつくら來て、一錢銅貨アくれたんだ、可愛らしいけんど、どふすべい、五兩も六兩も借てるもんに一錢がおになるべいと思つたが、よく／＼思ひ直して、今夜つける油もねいから、よし／＼これで蠟燭一挺買ておいさんとふたり暗闇で今夜泣くとこを、このおかげに、燈がつけられると思つてチ、万やへポツ／＼いつて蠟燭一挺買つてチ、直く歸らふとすると万やの五郎兵衛どんが、おとめさん久振りだ一服吸つていきなつて愛想するから、其氣になつてちよつこら腰を息めてると、そこへあすこのかみさんが出て來てチ、思付いた樣に「オヤ、おとめさんかへ？きのふ來た手紙を忘れずにやらないではといふので、五郎兵衛どんも漸く氣がついたと見へて「さうだつけ、モウちつとで忘れるとこだつけ」といふ樣な譯さチ。わたしも粟アくつて「なにかへ、芳んとこから來たんじやねいか」ッていふと、それだといふのさ、挨拶もろくにしねいでうちへけいて蠟燭うつけておいさんに讀んで貰ふと、今度福井ツていふ方へお供に來て、大分お金の貰われる樣になつたから月々送る、これは久しく溜めておいたのだから少し計りだけどつてチ、十圓札が一枚はいつて居るじやねいか、おいさんもわたしも頭ア擧らなかつたチ、嬉し泣になけてよ、

ばあさんは其金で店賃も、他の借財も奇麗に拂つたといふ話しをまだ長／＼としつゞけ、大家がどんな顔せしたとか、あとに殘つたお金はどふつかふとか聞手のあるまゝに嬉しげに話しつゞけまして、私が一錢銅貨をやつた時とは月と炭團ほどもちがふ顔して、大口にアハ、、アハ、、、と笑ひ興じ升

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

て、一時間餘もたつたあとで漸く手桶下げて家へはいり升た。ばあさんにも、おのぶにも少しも氣がつかなかつた樣子でしたが、私は子供心に此老夫婦の悦の中には私の一錢銅貨が餘ほど役にたつて居るといふ事を氣づき升た。おのぶにも申ませんでしたが、私は歸りがけ何となく嬉しく、自分の手柄ではない中にも一錢を眞心もつて人に惠んだおかげに金銀に勝たつかひ樣が出來たと思ひ、足が地につかない樣に跳び〳〵家に歸り升た。

小説

春風裡

トーストイ伯、著。
不知庵主人、譯。

第五（下）

其夜は翌る日の事など考へながら優に床に就き、翌朝は日出と共に起き、園の周圍を運動した。恰も今や昇らむとする旭日は半ば木葉を震ひ落したる菩提樹の木の間を透して白色の光を投げ、道には落葉堆積し、天竺牡丹は萎んで幹折れ將に倒れんとし、霜は既に降りて草原より椽側の鐵欄干まで白く薄綿を被せ、空は澄渡ッて一片の雲も見えぬ。

『もう今日となッた』と自分は心中に思ッた、『明日ッからはもう此家にゐないのだ。マカアやツオニヤとゐるのも今日限りで、明日の朝ッからはツオニヤを起して鈴の樣な笑聲を聞く事も出來ないッ』

其朝はセルギイが待遠しく、一種の不思議な感情に充たされてヂレてゐると、セルギイは忽ち來て、正午頃自分の兩親の追善の爲め一緒に會堂に行ッた。

『お父さんやお母さんが生きてゐらしッたら』と諸共に家路に戻る時、自分の心中で囁々く樣な聲がして、自分は無言で亡き親の最親の友であッた人の腕に凭れ、會堂の石階に向て首を曲げる途端に、父の靈が自分の傍に現前した。

過去を追臆し又將來を想像し、前途に橫はる希望を繰返し、或は喜び或は憂ひ、我が心は是等をゴッタにして不思議な感

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

情を生じ、新鮮の空氣も蕭然たる風色も寂寞たる田野もしめやかに輝ける日光も悉く我れに全情を現すらしく思はれた。

不意にセルギイは其思慮ある顔を自分に向けた。で、自分は『あたしの思ッてる樣な事を云ふンだらう』と豫想した如く、渠は自分の亡父の咄を物語ッて、忽ち云ッた『お父さんが臨終に私に云ッたッけ「どうぞ此カンヤを嫁にして呉れ」ッて』

『お父さんが御存じなら決とお喜びでせうネ』と自分はセルギイリにすり寄りながら云ッた。

『其時には僅だ極小さな孩兒さんサ』と自分の顏を覗込む樣にして、『其時分には能く貴孃の眼に接吻したッけ、お父さんそッくりだから……しかし今斯うやッてこンなに一緒に歩かうとは思はンかッた』

自分二人は餘り通ッた事のない道を取り草を刈ッた跡の野原を徐に歩み、殆んど人行もなき道で誰一人として自分の足音又は話し聲を聞く者なく、右手は遙かの森に連續する茶褐色の牧草茂り、左手は前夜の霜に惱める冬麥の圃廣々として、蜘蛛の巣は其間に長く糸を張り、自分は其顏にかゝり毛髮に纏はるを拂ひのけて行き互に物語る聲は空に響きて、自分共は宛がら宇宙に飛翔せる一個の動物に過ぎざるが如く、又宛がら秋の太陽の燦然として輝ける青天井を戴きて濶歩せる者の如くあッた。

斯くて家に歸ると、セルギイの母と止むを得ざる二人の來客は自分を待受けて、是よりは會堂で式を濟まし馬車に乘てニコオルスキイに行くまでは二人限の事はなかッた。

結婚式の時は會堂は全く空しく、自分は奏樂所の傍に立つタシヤナ、セミヨーノウナと、白茶の「リボン」を飾り涙に眼をうるませるマカアと、珍らしげに自分を瞻視める二三人の田舍娘を見たばかりで、眼前に相對せるを知りながら却てセルギイの姿を見ず、祈禱を聞いて折々高らかに應答を繰返しても、其聲は更に我が心に響かないで、壁上の聖像に向ても祈禱する方角もなく、唯ぼンやりとして蠟燭、刺繡の打敷、書欄屛障をながめて、敎主が自分の頭を撫で自分の結婚を喜ぶといふまでは殆んど夢裏を繞る心地で、此時初めてはッと氣が附いた。

マカアとタシヤナ、セミヨーノウナは自分に接吻し、頓て

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

リゴリ老爺が馬車を呼ぶ聲を聞いて初めて結婚が無事に濟ソで格別我が心意に異常な感覺を與る事もなく終ッたを悟り、駭然として且つ恐ろしき樣で、セルギイと互ひにキッスしたが、此キッスは自分の心には何だか珍らしく變ッてゐるらしく思はれて、竊に『是れだけの事か？』と思はずにはゐられぬ。

頓て自分共二人は會堂の前の廣場に出ると馬車の音は轆々として涼しき風は自分の面を拂ッた。で、セルギイに助けられて馬車に乘ると、此時日は既に山の端に落ち、黃昏時の風寒く、月は一道の素光を放ち、野も圃も銀波の漂ふが如く見えて、セルギイは馬車の戶を閉ぢて自分の傍に座し、自分は窓から外の景色を眺め、心穩やかに曾て待設けし程の事もなく、豫想に相違して暢やかに出立した。

不斗首を向けてセルギイに何か言はうとしたが、さて何といふ言葉もなく、遽に何だか恐ろしい樣な畏い樣な心地がした。

『今までは本統とは思はれなかッた』と渠は自分の一瞥に對して裕然と答へた。

『何だか心配で』と自分は云ッた、『何だか理由は分らないけれど』

『何が』と自分の手を取りながら云ッた。

『貴郎が』と自分は答へ、渠の手の上に自分の手を重ね、心は石の如く冷たくなッた。するとセルギイは自分の手を取て接吻し、自分の心は再びドキ〱して眼は霞み、四邊朦朧となり、最早セルギイを恐るゝ念も消え、我が心は總て釋然として愛慕の念は更に燃立つ樣で、未來の幸福一切は悉くセルギイの力に懸る事と合點した。

雜錄

母の別れ

ひさご

無情の者にかんじ、有情の者に心つよきためし、人の性にあ

る習ゑ。雪に折るゝ松よりも、柳のさすがにそれもあへで、たをやかなるが、何となくつもれるを、拂はまほしくなるものゑ。ことこそかはれ、人もまた、桃色木綿まとへるほど、漸く起ちぬなどいふ頃ぞ、かなしきものなるなり。道の行づりに見ても、涙こぼるゝやうに、抱きとらまほしく來ぬるや、わが心のことなりたるにか、はた人もしかるにか。我やのむかひの家に、やめる人ありと聞ゆ。四人の子のかしらは女にて、十一二斗ならんが、二ッ三ッの子おひて、いつもの如く遊を呼て、やませ給ふ人は誰樣ぞと聞しに、母樣なり、といひすて鬼わたしの鬼の子近きぬとみて、又あわたゞしく走せさりぬ。しばし、子供等の遊さまみて、出入もしげき樣子なるは何の病にか、案ずる樣子もみえぬは罪のなきものといはんか、もし、たけもとゝはぬ身に、こえふとりたる弟おひてうちはしり、まろびこけぬればとて、はしり出、起こしてちり拂ふ、母なくならば、いかならんと、よしなきおもひこしに胸ふたがりて、そこらそゞろありきせし歸りぢ、おそるべく、うれうるべく、かつはよろこぶべく、年老給ひし、父君の許もとひて、我家へ歸りぬるに、ヤヨ人ではかなきものぞ、かの家の病人は、今こそしぬれ、門さわがしさに出て聞ば、息引取らんに、唇しめす楊枝やあると、かの家の隣なる人、家の者にたづぬる聲聞ゆるぞや、四人の子供等こそ、いともあはれむべきものゑ、など人の、のたまふ、アナヤ、しかるにか、鬼わたしして遊びし子はいかにと、又再度外に出しに、かの子取卷て五六人の女の子、口々に、あなたのおつかさんしんで、などうち聞さま、七ッ六ッ斗なるまで、かたぶきて氣の毒げにその顏うち守れり。かの女の子、エ、今しんでよ、おとつさんがあたい、よんだからびつくりして、なんかとおもつていつたら、全しぬんだからこゝにゐろつていつたワ。さうどんなだつテ、と聞は十三斗の女の子なり。こわかつたからみなかつたワ、とて少しすりあかめし眼に今やおちん斗に涙た、へたりしが、ふとおもひ出せしやうに石蹴なさいナ、といひだせば、エ、しませうと皆パッとちつて、一人は袂より白墨とり出して字を大地へかきはじめぬ。興さめたる子供等の有樣に、我やに入れば、この夕ぐれより夜にかけて、何となくあたりみられ、もの淋く、つねにものいひ姦しき井戸場も、闃として音なく、折々水汲音は彼家の人なめり。明の朝

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

も過行鳥の啼音かなしく、かきねのあなたの大木の上に、いつもなきかはす、からすの聲もことなりて聞え、まどよりかの家の屋根みて、そこの人々の心をも思ふに、ことにかなしきは、乳ぶさはなれざりし末の子なり、よべもいたくなきて、誰やらん外へ抱きて出しやうなりと、人のいふにかなしさやる方なし。この日は父の傍に一日遊びてか、この末の子の泣聲も聞えず、出入しげきがおもしろくてか、いつもの子供等の中にもこゝの子は、まじらざりけり。葬式はあすの朝七時なり、今棺へ入れぬ、など他の子供らのかたらふ聲もれ聞えて、人のさはせぬものぞなどいへどきかで、この家のめぐりにさわぎてあそぶ。その日、おほたもの淋しくて一日を送り、夜に入れば、年若き女の四十九日の間屋根はなれぬ、といふに人魄にても見えずや、とて、おそろしがる、この言葉よりうち寄、幽靈の物語り、などして、いねし眞夜中、ふと目さむれば、鈴の音、草木も眠りしさよ中の靜けさをやぶりて、いとさえて聞え、ねぶげに讀經の聲そひて、南無あみだ、なーむあーみだ、となかくにぶき聲にかすかに聞ゆ、あなあはれと身の内ちゞむ心地に聞ば、ワッと泣立聲、カーチヤンヤアー、カアチヤンヤアーとて絶え入らん斗なり。衾かいのけて耳立起直りしが、さても詮なしと又横になりぬ。經もおはり、泣聲も次第〱に消ても、その夜の寂莫なるにかへれど、眼はさえ、胸つぶれてよくも寐入らず、翌朝は雨しと〱と降て人の袂をぬらしそへけり。かの女の子は白き衣かへて、車にのりて供にたゝんとす、めづらしげにうちかへし〱みて、隣なる家の妻におばさんありがたうとてうちゑむさま、よき衣の花見小袖にてもきせられたらんやうなるもあさまし亡人にも四人がなかにて、長女のこの子、母の手もとにことに多くのとし、慈愛蒙りしならんを、心なきにもほどありと腹たゝしく、つひにはおもひぬ。雨はなほ降りまさりぬ。いざやとかき出す棺に、門に立つて前かけに顔うち掩ひ、見送る女中の肩に、十文字におはるゝは末の子、涕のひまにあなたみよとゆり上げられて、あきし眼、よべの長なきに梅干のやうにはれて、よくもあきえず、しばし、あなたみて又うと〱と寐入りぬるさま、いとしともかなしとも、たれの涕もこの子に多く濺ぎぬ。嗚呼、父やいかに、この夜、日頃のつかれに寐入し懐、さゝやかなる手に探られて、人しれぬ涕にむせびぬ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

べく、四人の子にせがまれて、亡妻こふる思、日に〳〵そひまさりぬべく、とし月經て更に子らの生立をも見せまほしく、しのばれぬべく、遂に形はなくとも、幽明の界ありとも、かくて、よを終ふる迄、亡妻をかたりかたきとして、寐覺〳〵におもひを通はしなんか、など四五日經し後には、はやくもこの判斷に隣家の妻は案じわびぬとか聞えし。

儉約の覺悟

むかし大河內金兵衛といへる武士寒中松平伊豆守の許を見舞ひしに對面の內殊に寒かりしかば、老人の事なれば苦しからず、遠慮なく頭巾を召され候へと伊豆守强ければ、金兵衛左候はゝ御免下さるべしとて懷中より古き頭巾を出して被りたるに、其頭巾は木綿にて拵らへ、如何にも古く見苦しかりしかば、伊豆守小姓に申付け、奧より縮緬の頭巾の結構なるものいろ〳〵取寄せ、此內何れにても御目好に思さるもの召されよといひければ、金兵衛答へて、扨は自分の頭巾見苦しと思し召されての御心入れにて候や。御厚志は實に千萬辱なく候。然し頭巾は公儀に用ゆるものにては無之候。被り居候共、人に逢へば脫ぐものにて御坐候。然れば結構なるを被り候とも、無益の事にて候とて更に取り用ひざりしといふ。又同人或時門外の路を下々に指揮して修繕させけるに、折柄托鉢の僧壹人通りかゝりけるを、今日我齋なれば食を振舞ひ申べしとて招き入れ、寄附とて黑米のやうなる飯に、ざく〳〵汁香の物はかりにて振舞ける。僧思ふやうは、是程の身上に似合ざる事かな。是はわれをなぶるにやと思ひながら、食を終りしに、金兵衛僧に向ひて快く喰ひ玉ひたる事喜ばしく候。左候はゝ御布施を進じ申べしとて靑ざし一〆文取寄ける。僧は之れを見て思ふやう、飯は假令麁末なり共、是れを賜はらむ事大慶なりとて喜色面に顯はれける。時に金兵衛其緡を解き、其中より纔に壹錢を拔きて、之れを扇に載せて出したり。僧愕天して早速には手に取り兼けるを。金兵衛之れに諭していへるやう、御坊必ず不足に思ひ玉ふな。子細は一日が間地を堀りても錢壹文出べからず。然るを手も汚さず壹文取得らるゝ事結構なることには非ずや。其上壹〆文の內壹文にても足らずば、壹〆文とはいひ難し。されば是も國の實の壹部分には

非ずやと道理を責ていひしかば僧も是非なく取戴きて歸りしとぞ。儉約と吝嗇との相違は是等の事にて分別すべきか。

因に云松平伊豆守も亦中々心掛厚き人にて、日々出仕の時に裏付の上下を着ることなく、宅に居る時も亦曾て用ひたる事なし。常に人に語りていへるやう、人の心は衣服に依りて變ずるものなり。出仕して恭敬を存せざれば、忠を盡すとは得難きなり。先づ衣服より心を注けて恭敬を忘るべからず。我等に於ては斯の如く勤めざれば、忠勤は爲し難しと。

○人を用ふるの用意

備前の士泉八右衞門といひしは有名なる熊澤了介の弟にて德行の聞へありし人なるが、國政議定の席に出よと國主より命ぜられて、毎日列坐し居けるが、別に其職なかりしかば何事もいはず。只沈默して在りけるにぞ、時の人之れを譏りて、何の爲にか出で居るならむ。八右衞門は陶器にて造りたる方よかるべしなど評せしを、時の國主池田光政之れを聞きて、臣下に諭していへるやう、八右衞門が居たらむ所にて、假にも虚妄の言を吐くものあるべからず。人の德化は言ふと言はざるとには依らざるものなりと。

大博覽會通信

婦人大會景況

在シカゴ　楠原子、報

（第一回）

世界大博覽會の附屬館として、さまぐ\の會合集議の用に宛てたる大會館アート、パラスは、其開館の式を執行せしのちの第一用にとて、婦人大會を催ふすをことなせり。

會館の長は、ボンチー氏、書記はヤング氏たり。館の婦人部長は、パルマー夫人、副部長は、ヘンロチン夫人たり。而して、最初一週間、「世界婦人の進歩」を題として、各國の婦人代表者が大會する集りに於ては、メー、ライト、シチール夫人其主會となる。

館内、多くの室あり。最大の室二つに、ワシントン室、コロンバス室の號を附す、各々三千人の聽衆を容るゝに足る。其他三十八九の小室あり。

扨て、五月十五日午前十一時となれば、最と嚴そかなる式を以つて、世界各國婦人代表者大會の開會式を執り行なひ、其の後ち、左の各室に於て、それぐ\小會合を催ふしたり、

第二十號室に於ては、慈善救濟の事につきて。
第廿一號室に於ては、職業の事に付て。
第廿二號室に於ては、宗教の事に付て。
第廿七號室に於ては、教育の事に付て。
第廿八號室に於ては、文學及美術の事に付て。
第三十號室に於ては、科學及哲學の事に付て。
第卅一號室に於ては、法律及政府の事に付て。
第卅二號室に於ては、道德及社會改良の事に付て。

當日午前の大集會に於ては、パルマー會長の紹介をもて、各國著名の代表婦人、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

讀次に立ちて演說せり、
第一に出しは、英國婦人撰擧權同盟會の代表者フロレンス、ヘンウイツク、ミラー夫人とす。其演說中に言へらく、
英國の老女巫マザー、シプトンが預言の一つに、二十世紀は、婦人の世紀ならんとの言ありしが、今果して効驗あり。吾等が幼年の頃ほひには、女子が今一層の力量を備へ、更に大なる權利と義務とを所有するに至るべしなど論ずるものあるときは、之を一般にアメリカ主義と稱へて、人々、暗に輕蔑したるに、今は形勢全く一變し、世界婦人一堂に相會して、此の盛んなる大會議を催ふすに至れり。此の新らしき路を切り開きたるの大功は、之をアメリカの婦人諸君に歸せざる可らず。余は、信ず、余が死する前には、カンタ一バリ一大僧正の坐席に婦人の坐わるを見るの日あらんと。之れ一の妄想に過ぎずと嘲ける人あらんかなれども、此の妄想は極めて美くしき妄想なりと人は許すらん。扨て吾等が屬する婦人撰擧權同盟會は、國會議員の撰擧權、離婚法の改良、財產遺傳法改正等に對して、專ばら盡力せり云々、と。
繼ひで、演說せし人々は、英國のジエーン、コブデン、アンウイン女史。日耳曼婦人を代表しての、エリサベス、ケイスロウスキー夫人。佛蘭西婦人を代表しての、イサベル、ボジロット女史。ニウ、サウス、エールス婦人を代表しての、マガレット、ウインデア一孃。等にて、其后ち、此回瑞典政府より公然博覽會委員として送られたる男爵夫人ソルボルグ、ラップ女史。グリーキ婦人を代表してのカリルホウ、パーレン夫人亦た演說せり。
當十五日と云へる一日は、驚ろく可く忙わしく、又驚ろく可く盛んなる日にてありき。十一時の開會式に先だち、開館式あり、議長ボンチー氏、部長パルマー、夫人、副部長ヘンロチン夫人、會長シチール夫人、等の演說、並に、英國のアベルデーン伯爵夫人が答辭などありて、コロムバス室內三千の坐席は立尺の餘地もあらざりしに、十一時より婦人會合の爲に更に特別に開會式ありたるときは、ワシントン室內に別に新らしき三千の來會者あり。而して、午后二時半より、四時半迄で、自由交話の親睦會ありしに、會長、部長、其他、主もなるそれ〱の迎接に對して集まり集へる客、凡そ五六千人ありしと聞ゆ。

家政

子供に付て（三）

しづ子

十年二十年の間近い未來に皇國の運命を一手に握らふといふ人々をまのあたり私どもの手に委ねられて居たヿですから、大抵のヿはあと廻しにして、專心にその爲に盡すが至當でムませう、誰が考へて見ても至當と思ひませう。

子供を養育するには心を配るヿも、手足を働かすヿも實に一と通りなヿではムません。それ故妻君が錯雜な家政万端を修理して行く傍、三ッ兒の心事の委曲なヿにまで立入り、其原因を觀、結果を察して、恭しく其教育の任を擔つて行くといふのは甚だ望ま敷ヿで、中〱須たれぬヿです。隨分外見のヿには世話をやき、氣を揉む母が、却つて子供の品性上永遠の結果を遺す可きヿには一向見むかぬヿが有樣です。譬へば來年花子の七才のお祝に着せる晴着を今年の春から心掛けて、アク

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

せくと氣を揉む母親が花子が近ごろ一處に遊ぶ友だちの爲にこれまでない惡い癖が出來て來たことに氣のつかぬといふ樣なこと、また下女を敎へて追々は任かせて差支のない家政の細かいことを自分の手一ッに引うけ、子供は邪魔物の樣に下女と遊びに出すといふ樣なこと、これらは實に親子の間の親睦を破り、敎育の上に尠からぬ害を及ぼす原因と思ひ升、中以下の人々の家庭は此一事には却つて上等社會の者より勝つて居ることが有升、されば心ある婦人はたとひ人を雇ふ資産のあるにもせよ、なる可く幼兒を手なつけるが大切と思升。學校敎育の失敗する大きい原因と云は、師弟の間に思遣りの薄いことです。それが爲に聲を枯らし、汗水になつて、骨折る先生の敎訓が一々正的へは中らず、居睡る生徒、欠伸する生徒が多いのです。

さてそれならば、どうして好いかといふと、第一に今の細君が家庭敎育のことにモ少し時間と心を用ゐるといふことが大切です。料理のこと、掃除のことなど、お人によつては下婢に任かせるがひどくお嫌らひの樣です、それで裁縫は婦人の嗜といふ古しへの諺にならふて、金錢の問題は措いて始終針箱をお手元へ引つけてお置になる奥樣が多い樣でム升。結構なことで、他に輕重の比較をとることがなければ、誰も其お心がけを感服せぬものはムません。併し前に申た大切な御國の小民の上を思ひ升と、折々お料理の鹽梅が一寸違ふ位は忍んで頂き度、お掃除もお氣には入升まいが、下婢も任かせられるとなると、存外氣がはづんで、注意も致す樣になり升。それに洗張り、裁縫などのことは、他に生計の道のない女どもにさせて下されば大層な慈善になることがム升。奥樣が坊さまや孃さまと御一處に遊んで其合手をなさると、幼稚園が戸々出來る樣なもので、子供のためには母に勝る保姆は有ません、先づ子供の嗜好を考へ、工夫を凝して、其心術を發達させる方法を取らねばなりません。適當な方法を得るまでには、幾度となく試驗をして見ねばならず、また子供は新奇を好むものですから、それからそれと、品を變へて見ねばなり升まい、どふも面倒なことをいふと仰るでせうが、御愛兒の爲になさることといひ、重衣の褄先つくる割をなされば、別段六ヶ敷は有升まい。まして長の年月學術の研究に心を潛められたお方々は、家庭敎育に是非お技倆を見せて頂かねばなりません。幼稚園へお遣しになるにせよ、それまでに餘ほど子供の性質は出來てしまひ升。

第二にどふぞ子供にモ少し自由を與へる樣に致し度のです。子供に對していふとなると、成人は「さうするな」「それはいけません」といふ樣な禁制的の言葉計が多い樣です。なるほど子供は吾儘な樣ですが、それは遠慮するとか、人の爲に忍ぶとかといふ德義上の考の起らない先のことですから據ないこととして、さて子供は權理を主張するといふ樣なとは聊かも知つて居ません、その處を力も強く、經驗も餘計な私どもが觀定違ひをしたり、無理をしたりしては、實に憫然でム升。たとへばお膳に就てお飯を分てやる、菜をとつて遣る、凡その分量をして當がふもの丶、食べ度なくとも是非器へ殘してはならぬといひ、いつもこれ丈啖あとはどうしてもやらぬといふとなど躾としてまゝ見るとですが、私どもでさへ、分別して加減する私どもでさへ、物を殘す自由は自ら許し升ものを、子供に對して此制限は實に無理と思ひ升。私どもは折々譯も分らず氣分のわるひとが有升。頻りにイラ〳〵して、癇癪の起る時が有升が、前方の經驗からみれば、消化器の工合がくるつた所爲だとか、きのふ歩き過た爲だとか、畧ぼ原因が分り升から、散歩をして見るとか、少し晝寢をして見るとかまたは、藥を飲んで見るとかして、あしたはよくなるだらうと分別をつけ升、隨分原因を知つて居る時でも、情は抑へ切れず、居圍りの人々にケンツクをくれるとなどが、道德論をする成人の男女にさへある處ですから、氣分のわるい言分を知らぬ子供はどの樣にも勘辨して遣り、不機嫌の基をたゞして補を見出すが正統なるを、世間には子供が氣分のわるさに平常の元氣なく、母や守などに言葉がへしをし、柔順でないのを一途に「すねてゐる」といひ、「この强情もの」と罵つて、責檻するとが折々ある樣見受升。子供がたとひ思ふ通りに振舞わぬとて、是非造つた摸型通りに嵌込まねば承知せぬといふとは、理性を備へた親たちの爲ま敷とです。病を吾儘と思ひちがへ甲斐なき後悔に一生を送つた例は、誰も聞て居る事柄です。それに自由を與へて置ねばならぬ、極大切なとは、子供の遊戯のとです。極く幼少の折から八九才まで、さうでも有ませんが、それから先子供の遊戯するのは、多く親たちが默許する位がせい〳〵で、たとひあね樣を飾にしろ、釣に行にしろ、親たちが深切に加勢して相談合手に成てやると云は、實に稀の樣です。假令ひ、花子の雛遊は坐敷を散し、太郎の遊泳は危險があつても、子供の遊戯は大抵其發達の機械で成人の、日々の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

事業と異つた事はないのですから、なる可く賛成し、手助でもして子供の歡樂を增してやるが宜しうム升。私の知つて居る八才の女の兒は、其父の事を私に話しきかせた末、「あのネ、あたしつとうさまは、あたしと丸で兄弟見たい」といひ升た。かふいふ親子の間柄が續き升と生涯兩方の幸福でム升。

手製ラムネ

茶呑茶碗にうどん粉一杯水にて溶し、一升の熱湯に混じ、砂糖二斤半をこれに加へ、五分間煮たて（香料としてレモン二ツの搾り汁を入るゝも好し）置き、冷したる上にて玉子の白味二ツよく掻廻したると酒石散二オンスとを加へ、布にて漉し瓶に詰て貯へをき、用ゐる前には瓶を水にて冷し、冷水を盛たるコップに凡そ三茶匕ほど入れ、少しく重炭酸ソーダを加ふれば隨分結構なる飲物たるべし、

此ラムネ存外お氣に入ることと信じ升、是非お試み。

田家のこよみ

畜耕子編

○夏の土用七月十九日○溫風至　○蓮始開　○鷹乃學習

○七月十日より廿日迄農事

○挿木　肉桂、蘂山、岩桔梗、菊等挿してよし、

○接木　牽牛花を蕃藷蔓に接かへてよし、かくすれば花輪甚だ大になるものなり

○雜事　此節は牧艸最も繁茂すれば、餘り硬ならしめざる樣軟艸の内に苅り採り貯ふべし。

稻田灌水の加減は甚だ緊要なれば注意すべし、氣候の冷なる時は水を減じ、旱暖なる時は水を增さゞるべからず、殊に穗の抽き出むとする前には日中灌水を引かざる樣になし、秋風の害を防ぐ爲めには深く水を滿たしむべし。

○園藝法

第拾六　接木法

果樹接木の其目的效用は、種子に由りて蕃殖せしむるときは母樹と同一の種類を生ずること能はざるなり、又迅速の結實は望むべからず、同時同種の者を多く得べからず、茲に於て接木の有益なるを知るべし。今其效用の重なるものを擧ぐれば。

（一）果木の結果力に乏しきものをして夥多の果實を結ばしめ、或は結果力に乏しからざるものと雖ども尙更に神速に多量に結實せしむるの利あり

（二）資性虛弱なる果木を强壯なる樹に嫁接するときは、其性を變じて强壯ならしむことを得べし。

（三）果木老衰して結果小き者も其根尙强壯なるときは、其弱枝を除去して强壯なる枝のみを殘し、且つ之に善良なる果木の枝を接嫁すれば其結果力を恢復すること極めて偉なり。

（四）既に老衰せし果木に幼樹を嫁接して新鮮なる養液を供給するときは大に其勢力を挽回することを得るなり。

通信

淡海子編

●高知縣通信

◎囚徒の作業　高知縣監獄署最近の調査によるに囚徒の作業は大工、桶、竹、傘細工、鍛冶、靴、裁縫、藁細工、機織、染物、製紙、燐寸、舂米等にして就役人員の最も多きは藁細工にして六百二十二人之に次ぐは製紙にして二百十七人其他を合せ現在就役人員一千二百〇三人なりと、

◎幼稚園　市内第二小學校附屬幼稚生は在籍百〇二人ありて保姆は二名なるが追々生徒も增加せるの見込あるを以て一名の保姆を增し且增築の計畫ありときく、

◎女學校の職員會　去月廿九日高等女學校に於て開きし同校職員會議にては左の通り決議したりと

一、每月一回土曜日終課後に於て生徒親和會を開き職員一同列席して生徒職員の親密を謀り而して婦女子に有益に有益なる談話をなす事尤も此會は生徒より成立したる者なれは學校は只之を監督するのみ二、婦女は家內身躰の清潔を貴ぶの習慣を必要とするを以て每週一日自己の業を受る教塲を順次交番にて掃除せしむる事とし職員一同此れに關與する筈、

◎土佐音樂會　植物學上有名なる牧野富太郎氏歸縣に付今般左の條々を議定したり一、同會主任教師は光森女史に依賴する事、二、同會教科書は小學唱歌集幼稚園唱歌集中等唱歌集三、男女は會日を異にし男子は火木土女子は月火金を以て集會し日曜日は倫理及國語の硏究を爲す事、其他二三なりと、

◎衛生　高知市內にある開業醫は七十四人產婆は二十五人灸治五十人藥舖四十六人鍼術九人按摩五人

●宮城縣通信

◎宮城女學校卒業式　は去月廿八日午後七時半より開會せらる、其順序は。合奏(ピヤノ)宮本むら子。歡迎の辭、武田かれ子。英唱歌(忍草)石井さき子。奏樂關屋ゆき子。英暗誦(夜半の捨小舟)石井さき子。過去の日誌、宮本むら子。奏樂(ピヤノ)石井さき。英唱歌(遠山寺の鐘の音)石井さき。奏樂(オルガン)宮本むら子。告別の辭、關屋ゆき子。唱歌(クラスオード)右了りて餘興等ありて閉會せられたり、今回の卒業生は、武田かれ子、石井さき子、宮本むら子、關屋ゆき子の四氏なり、黑澤かちゑ子は嚴父の永眠にて本年九月の卒業なる由、

◎東北學院の卒業式　同院今回の卒業生は、出村悌三、今井榮吉、末次政次郎等の三氏なり、同院の卒業演說は去月廿五日午後三時押川校長の由、

女報

淡海子編

●外人我皇后陛下の仁德に感激す　先年四ヶ年間クルップ氏代理として本邦に駐在せし、普國陸軍砲兵中佐イルゲテル氏は、赤十字事業に熱心の人にて我國在留中親しく我　皇后陛下が殊に赤十字事業に御心を留めさせたまふとの厚きに感激し、事に觸れ折々思ひ出し奉るとて近日赤十字に關する書籍を石黑軍醫總監に寄せ同君よりよき折を以て　皇后陛下に獻じ奉られたしと申越されたる故總監は此頃之れを宮內省へ差出されたるに辱くも御受納在らせられたりとぞ、

●高等女學校令　井上文部大臣は豫てより我が國婦女子の風儀漸次紊亂の傾向あるを憂へ、其原因を討究せるがこは職として女子の敎育不振の結果に由れり、殊に地方に依り敎育振作の爲めに著るしく風儀を矯正し得たるの實例あるに由つて明かなり、去れば井上大臣は今度大いに各府縣を奬勵して女子の敎育を振作せんと欲するの考案あり、過般來屬僚をして高等女學校令の取調に從事せしめ居られけるが、草案脫稿の上は普れく敎育家の意見を徵して、充分の審議を盡し、文部省令を以て發布するの決定なりと云ふ、

●萬國婦人會議の衣裳論　シカゴ大博覽會開期中に開く萬國婦人會議第一回は、去る五月十六日博覽會境內美術館の廣間にて開けり、同日は衣裳案を討議せしが其の要領は女裳の長く地に垂るゝを廢し地上一呎八吋位の所にて止め、兩足には脚半を穿つの方法なりといふ、

●女子學院の卒業式　は六月廿九日午後三時より其式を擧られたり、今其順序を記さんに。始めに祈禱を以て開き。唱歌。邦語文章(幼稚園の作用)安田いわ子。英語文章(見堺)金子とも子。獨奏、古澤みか子。邦語文章(保姆の資格)秋庭あさ子。獨奏、五島あさ子。邦語文章(幼稚園と家庭)佐久間みつ子。唱歌。英文章(音樂の勢力)望月きく子。獨奏、山岸みつ子。等なり終りにナックス氏卒業生に對する感話等あり此式を了れり、今回の卒業生は高等科三名、普通科十餘名なりき、

●大日本蠶絲會　王子西ヶ原にある同會は追々會務を擴張せしに從ひ入會者も多く、現在の地に在りては不都合なれば、同事務所を適當の地に移轉せんと先頃來擬定中なりしが、彌々日本橋區吳服町へ新設する事に決定し一日より移轉する筈なりと、

●昨年伊太利の養蠶業　伊國經濟雜誌の報する所に據れば、伊國昨年の養蠶業は一昨年に比し更に衰退の狀を呈し養蠶者の數は、一昨年の五十八萬四千四百三十一人に對し五十三萬千八百六十九人に減じ、繭收穫高は一昨年の三千七百九十二萬二千五百六十二基に對し三千四百六十四萬千四百九十一基に減ぜり、蓋し此衰

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

況を來したるは主として絹絲の相場の下落に原因すと(東京日々)

●萬國博覽會婦人館　我國の出品は殊に第一著に陳列を畢り室內裝飾の如きも當國貴婦人社會に非常の賞讃を博し、既に去る十八日附を以て世界博覽會婦人委員會長パーマル夫人より左の書牒を贈れり、之を以ても其一斑を知るに足るへし

パーマル夫人は婦人館中日本婦人會に交付したる陳列室に於ける出品及裝飾の美麗優雅なるに對し、米國「コロンブス」世界博覽會婦人委員會の名を以て其稱讃及謝意を表す

千八百九十三年五月十八日日本帝國事務官手島精一殿(六月廿日官報)

●靑山英和女學校の卒業式　は去月卅日午後二時より其式を擧られたる由、

●橫濱共立女學校の卒業式　は去月卅日午後其式を執行せられたる由、

●品川子爵令息の婚儀　品川子爵の長男彌一郎氏は、今度福羽逸人氏の令孃(美靜子爵の孫孃)と結婚の約整ひ近々入輿の式を行ふ由

●一週間內の出產死亡　東京市十五區に於ける去月六日乃至十二日の一週間內出產の數は四百六十二人(內男二百二十九人、女二百三十三人)死胎出產五十二人、死亡の數は四百七十七人(內男二百四十六人、女二百三十一人)なりと、

●都下の結婚離婚　五月中東京市十五區に於ける結婚の數は七百三十九人(前月より增百十五人)離婚の數は百七十五人(前月より減二十六人)なり、

●高等女學校の規定　先きに久保田讓氏が普通學務局長在職中、幼稚園及高等女學校の規定を制定し以て、普通教育社會に於ける制度を完結せしめんと種々取調に着手せしが、其後氏は次官に轉し遂に辭職するに至りしを以て、木場氏が就任以來右高等女學校の規定取調べを繼ぎ此程に至り漸く立案成りたれば、直ちに省議に提出したりと云ふ、

●賣婬婦の密航　去月六日日露瀛船會社の幸盛丸が新潟港を解纜せんとしたる時警官稅吏出張して細かに船內を檢査したるに、某々樓の娼妓二名及び島邊の賣淫婦九名外に俳優の妻一名都合十二名の婦女子を發見せり、俳優の妻は本夫の携ふる所怪むべきなしとするも、自餘十一名の賣浮婦は何が故に關矢氏等と共に密航せんと企てし乎多言せずして讀者は其意を察し得べし、幸ひに警官の嚴責に値ひ十一名の婦女は悄然上陸したりと云ふ、聞くが如くんば幸盛丸の船長は彼れが如き賤業婦を載せて遠く海外に赴くことを厭ひ、密かに出張吏に訴ふる所ありて扨ては容易に彼等を發見し得たるものなりと新潟新聞は報道せり、

●浪花女學校全科卒業式　大坂仁右衞門町の浪花女學校は愈よ去月二十四日午後一時より第二回全科卒業證書授與式を行へり、同地の重立たる學校々長教員居留地の學事に關係する外國人男女幷に生徒の父兄等新聞社員、其他の人々式場に列し校長淸水泰二郎氏卒業證書を授與し、次で商業學校長成瀨隆藏氏祝辭高等女學校長栄直太郎氏の祝文朗讀卒業生の答謝、英詩、和文、告別、風琴、理化學實驗抔あり盛會なりし由、其卒業生は和田ちま、山田うの、淺野はるの三女なりと、

●工女の長野行　山梨縣內の製絲工女にして長野縣下の製絲家に傭はれ、十五六日以前より毎日五六十名より七八十名つゝ同地方に出發せりと、

●商品見本品陳列所の設置　オリエント新聞の報ずる所に據れは君士但丁の商業博物館は、日本東京に一の支部を設き爰に毛氈及繡箔物の如き、土國の重なる物產の見本を陳列するの見込なりと、

●女學校外室の新築　過日燒失せし松山私立女學校の教師館附屬外室の新築に着手せり、

●婦人の年齡詐多し　佛國裁判所長の實驗に係る記錄なりとて、此程出版せる書類の內に婦人の年齡に關して其眞僞を判ずるの最も困難なるを云へり「罪科を犯せし婦人が其眞實の年齡を白狀するは二十五歲以下か、さもなくば八十五歲以上の老婆なる可し、此中間の婦人は容易に眞實の年齡を云ふものにあらず、余が數十年の實驗に依るに婦人の年齡を云ふは二十九、三十九、四十九、五十九と九の位に留るもの多し、されは其婦人若し四十歲ならんには白狀の歲を三十歲と定め居るものにや」云々と、(中央)

●金城女學校の夏期休業閉校式は去月三十日に執行さるゝと云ふ、

●名古屋淸流女學校卒業式　去月廿七日第二回卒業證書授與式を擧げぬ、其概況たる先づ女生徒の唱歌あり、次に井手義久氏祈禱を爲し校長三枝光太郎氏來賓に對する挨拶を述べ、續て各生徒の奏樂、和英文章の朗讀、祝詞等あり夫れより卒業生龜井鎭子其他各及第生に卒業證書を授與し、且つ優等生に賞品を與へ畢つて平田平三氏の告辭、シンプシン氏の演說、音樂教師加藤柳子等の唱歌あり、右にて式全く終り來賓を客室に延て茶菓の饗應ありし、因に記す多年同校に在て盡力せしミスダンフホルス氏は今度一先づ歸米するを以て去月廿九日同校にて送別會を開きたるが、氏は一二年後再來する筈なり

●橫濱居留地、外人の醜業者　橫濱に於ける米人コープランドの醜業犯事件は同地警察署に於て調査せし、チヤプヤと稱する歐米各國人の醜業者を取調べたるものを聞くに凡そ左の如しと云ふ

米國人　十四人	淸國人　六人	英國人　八人	獨逸人　一人
佛國人　三人	墺國人　一人	米國人　四人	

是れ皆な我か無智の婦人を誘惑し私利を營むの猛省一番せさる可けんや(日本)

●悖行米人自殺せんとす　曩に日本婦女に醜業を勸めて百四十六圓餘の罰金に處せられたる橫濱山手居留地百二十二番館米國人コープランドは、去る廿六日午後一時同館の浴室に於てナイフを以て咽喉を突き一ヶ處は左耳の下長さ一寸五分一ヶ處長さ一寸五分深さ五分の重傷を負し苦悶の折柄、家內の者駈付けナイフを取上早速獨逸病院より醫師を招き治療を加へ直ちに山手ゼネラル病院に送り目下治療中なるが餘程の亂症なり、多分發狂ならん同人は素と獨逸人にして米國へ歸化したる者なり、

●和蘭國女皇の御不豫　和蘭國ウヰルヘルミナ女皇は本年僅々十三歲の妙齡に渡らせらるゝにも拘はらず、同女皇を除きては外にオーレンジ家の皇胄なきより、千八百九十年九月を以て踐祚あらせられたるが、先頃來御不豫にあらせられ近頃に至り頓に其の病勢革り、侍醫等も殆ど治療の道なきに苦しみ只管憂慮するのみなるより、若し此の幼女皇にして崩御せられたらんには、オーレンジ家玆に全く斷絕するならんとて同國人民は一般に痛歎し居る由

●男百人に女八十五人　府下部區男女の割合は昨年十二月末日の調べに市部は、男百人に女八十五人七一、郡部は男百人に付九十八人一二に當る

●高田女學校の普請　高田女學校にては校舍に破損の箇所もあり今度修繕旁增築をも爲すと云へり、

●**東京工藝女學校**　は杉森此馬氏等の盡力に因て創置せらるゝものなり、斯る女子實業學校の起りたるは我國の爲め甚だ喜ふべきなり、吾人同校の益々質實に成長し其盛大ならんとを祈る、尙詳細は本誌の廣告欄内に就て知らるべし、

●**東京產婆學講習所**　同所にては今回產婆學理上に關する講義錄を每月二回發行せらるゝの計畫あり、同所は熱心に此道の爲に盡されんとす、吾社同講義錄の發刊を刮目して待つ、

●**歌舞伎座に於ける養育院慈善會**　去る廿五日開かれ當日は日曜にて晴天なりしを以て頗る好景氣、來觀者凡千五百名井上（内相）夫人、高島子爵夫人其他澁澤榮一氏及同夫人、大倉（喜八）夫人等來會賣品賣上高は合計二百圓計り外に寄附金等も多かりし、昨日も中々の大入にて有栖川若宮妃殿下、香川皇后宮太夫女官數名の來觀あり、宮内省より金三百圓を同會へ下賜ありたり、閉場後は陳列の寄贈品數點を献納する筈なりと、

●**同志社病院看病婦學校**　の第六回生徒卒業式は去る廿八日午後二時より同校講堂に開けり、

●**米人フレンチ孃の講話會**　新潟縣高田女學校において去月十六日午後三時より米人フレンチ孃の講話會を開かれしが同日の出席員は惣て有志婦人のみにて六十餘名同孃には宗教上の事には一切說き及ばず米國の育兒及び衞生法等につき懇ろに講話し聽衆いづれも感に堪へて大に益を得しを悅んで閉會退散せりと、

●**醜業婦の擄請**　加奈太橫濱間の定期郵船エムプレッス、オフ、チャイナ號乘組のボーイに藤原某と云ふ無賴漢ありて、常に在外賣婬窩主の手先となり醜業婦密航の媒介をなし數多の周旋料を貪りて酒色の資に供す、去る四月廿五日橫濱出帆の同船に醜業婦七人を乘込せ、明櫃七個を購ひ來りて右七人の婦女を諳込み、五月十日バンクバー港に着し甘く稅關吏の目を掠めて荷揚をなし、旣に約束の場所に持行かんとする一刹那、忽ち四五人の警吏出張して件の明櫃を取押へたり、惡漢藤原は此の有樣を見るや已が惡事の發露せしを覺り混雜せる人足の中に紛れて何處へか影を匿したり、抑此の事が如何して斯く速に露れたるやと云ふに、右チャイナ號が愛に橫濱港を出帆する際他に又た一人の誘拐者ありて旣に六人の醜業婦を船中に連れ込み、之を厠の中に匿して內より固く掛金を締め自分は再び上陸して諸用を辨じ將に波止場に到りて本船に歸らんとする折柄、車夫躰のもの二三人躍ひ來りて先に厠に入れ置きたる婦女を速に我々に放還すべしと迫り、二三爭論の末忽ち一場の鬪爭を生じアワヤ其の誘拐者を毆き殺さんず權幕なりしが、其中關吏巡査等其場に驅け付け夫々取調べをなし、遂に本船に出張して右の七名の密航婦を厠の中より引出し、直ちに艀舟に移したりしに此の者等は却て巡査の處置を恨み、彼の船に乘組たるは自分等計りに非ずボーイ藤原なるものは先日より七人の婦女を明櫃の中に入れ潛かに食物を與へつゝありと云へり、然れども此時旣にチャイナ號は錨を拔て進航を始めたれば再び追跡して之を取調ぶるに由なく其儘上陸して事の趣をバンクーバーに電報し、右明櫃取押への依賴をなしありしより前記の始末に及びたるものなりとバンクバーよりの特發に見ゆ（日々）

孤兒之友

畜耡子編

巖手縣通信

盛岡通信員報

野州那須野曉星園主本鄉定次郎氏は、今回同園創業資金の寄附募集の爲め當地に來られ有志者を訪問せられけるが、豫て同氏が赤誠を耳にしたる折柄なれば、忽ち多くの贊成者起り、銳意盡力するものありて、旣に當地耳にて金三十余圓の義捐金集まり、猶本縣管內東海岸を三十餘日程巡歷せられ、至る所慈善幻燈會を開き、喜捨金五十餘圓に達せりと云ふ、尙二三の青年は同園の爲めに廣く江湖に訴えて義捐金を募集し居らるゝと云ふ

●孤兒之友取次義捐金第九回報告

金三百拾三圓七拾三錢八厘　第八回迄各孤兒院へ寄附高

金拾圓也　橫濱某君　博愛社遺族へ寄附

金三圓也　東京星野錄治郎君　孤女學院へ　同

金壹圓八十錢　同明治女學校愛の睦　同　同

金五拾錢　伯州米子の一少女君　孤兒之友準備金へ

金　拾　錢　東京無名　同

金壹圓八十錢　明治女學校愛の睦　孤女學院へ寄附

金貳拾錢　東京無名　孤兒之友準備金

金　五　錢　同　同　同

金三圓也　山梨縣英和女學校共愛會　孤女學院へ寄附

金壹圓八十錢　東京明治女學校愛之睦同

金　拾　錢　遠江國芳賀祐之君　曉星園へ寄附

合計金三百三拾六圓〇八錢八厘

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○貴孃紳士必需の香料　廣告

大瓶 六十五錢
小瓶 三十五錢

○人造麝香は佛國理學博士が化學的の作用を以て製造せし一大新發明品なり

○人造麝香は從來の麝香に比し數倍久數を保つのみならず實に非凡の香氣を有す

○人造麝香は純白清淨の粉末なるを以て衣類等へ擦り込みおけば一種云ふべからざる幽香を放ち大に神身の清浩を覺えしむ但し色つき又は汚穢するの患ひなし

○人造麝香は歐米各國の貴婦人紳士社會に於て隆んにこれを賞用せり

○人造麝香は瓶入にして其上木筒に入れ携帯保存等に尤も安全なる裝飾となせり弊店發賣は上圖の如し

（僞物注意）

近頃弊店人造麝香の裝飾を摸擬し發賣する者あれども右は品質雲泥の相違あれば御求の節登錄商標及（星野）の名義篤と御認を乞ふ

東京日本橋町伊勢町十七番地
日本特約賣發元 藥種問屋 星野與兵衛

○市内各藥店幷に全國有名なる藥店にて賣捌候 取次
御望の方は御申込あれ

文學界

第六號要目

六月三十日發兌

（ドラマ）茶のけむり　古藤庵

（吊歌）桂川　戸川殘花

刀鍛冶、堀井來助　無聲

劍仙、呂洞賓　井上活泉

グレー氏風雅の歌　鬱孤洞主

骨堂に有限を觀ず　天知

伊勢家集講義　大和田建樹

嵐雪發句撰

定價表

一冊	六錢	地方 八錢
六冊	卅三錢	郵稅 四拾五錢
十二冊	六拾錢	共 八拾四錢

東京市麴町區下六番町六番地

文學界雜誌社

蒙を啓き德を修むるは讀書筆算の專有にあらず然れども世の實業を主として技藝を授くもの教育と云ふ點に至ては大に歎すへきものあり當校は實用を旨として工藝の側よりして我邦女子教育の爲に聊か盡さんと欲す○術科○裁縫、刺繡、造花、圖畫、編物○學科○讀書、算術、習字、簿記、英學等生徒は右の內一科を修め又は數科を兼習するを得○費用○束修金五十錢、月謝及教場費とも金六十錢又事情によりては校費生として入學を許す、規則書は郵券二錢を要す

明治廿六年六月

東京芝南佐久間町二丁目十三番地

私立 工藝女學校

工藝女學校畧則

一當校ハ女子ニ適應スル技藝幷ニ必要ナル學科ヲ教授スル所トス

一教科ヲ術科學科ノ二科ニ分チ術科ニ於テハ裁縫、刺繡、造花、編物、圖畫等ヲ教授シ學科ニ於テハ讀書、算術習字ノ外、家政、博物、理化等ノ大意ヲ教授ス又望ニ依リ英語ヲ兼修セシム

一修業限年ハ術科、學科共ニ二ケ年トス

但シ事情ニ依リ術科ノミヲ專修スルヲ得

一術科、學科課程ハ左表ノ如シ

術科課程表

術科目＼學年	第壹年	第二年
裁縫	日本服小裁中裁衣服類西洋服下着類ミシン使用法	日本服本裁衣服及附屬品等西洋服小供婦人衣服及附屬品等
編物	衣服附屬品及裝飾品	同上
刺繡	綴縫、平縫、けし縫等	すが縫、すがら縫、肉入縫等
造花	裝飾品	同上
圖畫	水墨畫	摸様畫

學科課程表

學科目＼學年	第壹年	第二年
讀書	讀方 漢字交リ文 作文 消息文	同上
算術	加減乘除	諸比例 簿記
習字	平假名、行書、草書	同上
家政	衣食住ニ關スル家事ノ管理法 衛生、育兒、看護等	同上
博物	動物植物ノ大要	同上
理科	生活上緊要ナル理化學ノ要項	同上

右學科ノ外ニ時々道德ノ大要ヲ講述スヘシ

一授業時間ハ毎日凡ソ七時間トス但シ日ノ長短ニ依リ伸縮スル事アルヘシ

一學年ハ毎年四月ニ始マリ翌年三月ニ終ル

一學年ヲ分チテ前期後期ノ二學期トナシ前期ハ四月ニ始リ九月ニ終リ後期ハ十月ニ始リ三月ニ終ル

一毎學期ノ終ニ試驗ヲ施行シ其成績ニ依リ及第落第ヲ定ムヘシ

一各科ノ點數ヲ百點トシテ六十點以上ヲ得タルモノヲ及第トシ以下ヲ落第トス

一入學ヲ望ム者ハ入學依賴書ヲ差出シ許可ヲ得タル上ハ年齡滿二十年以上ニシテ府內ニ一家計ヲ有スルモノヲ保證人トシ在學證書ヲ差出スヘシ

但シ入學依賴書及在學證書ハ當校規定ノ用紙ヲ渡スヘシ

一入學スルモノハ束脩トシテ金五十錢ヲ納ムヘシ

一授業料ハ一ケ月金五十錢術科二科目以上兼修ノモノハ金七十錢外ニ校費トシテ金拾錢ヲ毎月五日迄ニ納ムヘシ

但シ病氣其他ノ事故アリテ欠席スト雖モ授業料校費ハ定日マテニ必ス納ムヘシ

一術科ハ專ラ現物ニ就キテ教授シ學科ハ可成實用ヲ主トシテ教授スヘシ

一術科ニ於テハ生徒練習ノ爲メ他ノ依賴品ヲ製作セシムルコトアルヘシ

一修業上入用ノ書籍、器具及ヒ材料ハ生徒ノ自辨タルベシ

但シ裁縫用ノ「ミシン」其他當校備付ノモノハ之ヲ使用セシム

一生徒ニハ通學簿ヲ渡シ置キ日々ノ出席欠席等ヲ記入シ之ヲ父兄又ハ保證人ニ知ラシム

一生徒疾病或ハ無據事故アリテ欠席スルトキハ其翌日迄ニ保證人ヨリノ屆書ヲ出スヘシ

一事故アリテ遲刻若クハ定時前退出スル時ハ當日其旨ヲ屆ケ出ツヘシ

一當校生徒ハ旅人宿又ハ下宿屋ヨリ通學スルヲ許サス

一退校セント欲スルモノハ保證人連署ニテ願出ヘシ

一休日ハ日曜日、大祭祝日、夏期、冬期休業トス

夏期休業 自七月廿日 至八月廿日　　冬期休業 自十二月廿五日 至一月十日

生徒心得

一生徒ハ婦人ノ本務ヲ忘レス總テ敬肅柔順ニシテ專ラ課業ヲ勵ミ校ノ內外ヲ問ハス輕躁ノ擧動アルヘカラズ

一生徒ハ平素可成丈質素ノ服ヲ着用シ虛飾ニ流レサル樣注意スヘシ

一猥リニ他ノ教室ニ出入スヘカラズ

一金錢其他ノ物品ヲ貸借スベカラズ

一生徒各自ノ物品ニハ悉ク自己ノ姓名ヲ記入シ置クベシ

一本則ニ揭ゲサル詳細ノ規程ハ別ニ細則ヲ以テ之ヲ定ム

明治廿六年四月

東京市芝區南佐久間町二丁目十三番地

私立 工藝女學校

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

櫻井明石君譯

希臘孝子腓立比（ピリピ）物語

大形洋綴美製
正價金卅五錢
郵稅　金六錢

此書は希臘の孝子が物語を、譯者三年の辛苦を經てものせし世に稀なる孝子か美談にして、既に數十種の新聞雜誌に公評ありたるものにして、對基督教忠孝論物爭の際に當り此書の生れ出でたるなり、乞一本を購ひて讀味あらむとを

女學雜誌社

星野愼之輔君著

昆蟲植物金石

採集法

正價金八錢
郵稅金二錢

昆蟲界
昆蟲分類
昆蟲變態
採集地
採集注意
採集器
貯蟲法
刺針法
昆蟲運搬法
幼蟲類飼育法

植物界
葉とは何
花とは何
枝とは何
植物帶
採集すべき部分
採集氣節
採集器具
乾腊法
標本製造

金石界
金石分類名稱
金石の現出
識別鑑定法
岩石の現出
土性の現出
土性分類名稱
土性分析法
採集器具
採集方法

麗かなる新綠の野外に杖を曳きし時、諸子は可憐なる蛱蝶を見て何かに感ぜしか、凉しき樹陰の溪流に沿ひ遠足せし時、諸兄は美麗なる昆蟲を觀て何かに感ぜしか。之を採りて直に納め、坐右に博物館を開きて友を延き、一は天の美を樂み、一は研究の好材料とせんとするならん之を以て散策一層の樂み深し、多愛なる諸友よ予が採集を講ずるは、蓋し割愛耳

女學雜誌社

巖本善治君講述

教育學講義

正價金八錢
郵稅金貳錢

右は君が、明治女學校、高等科女生に口授せられたる講義中、之れを筆記して、昨年七月より本年四月に至る、白表女學雜誌附錄として、續載せしものにして、先頃より之を一冊子として世に公にせよと請はるゝ者あれば。謂ば君の未定稿なれど、今般廉價を以て同好諸君の求めに應ぜむとす、

女學雜誌社

專門

梅毒
痔疾
淋疾
子宮

百毒即治丸

右速ニ全治受合也若シ全治セサレバ藥價返却ス●但シ診察無料

京橋銀座二丁目
東中通●畑中堂

山本醫院

山本醫院方劑◎無効返金一廻四十錢三廻一圓郵稅無料銀座二丁目十番地泰生藥舖販賣

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

中島湘煙女史著

善悪の岐

此書は青年男女が、情界の岐路に迷はんとし、世の怪渦に巻れんとして、彼が胞底若かも一片の光明は、善悪の岐に立てる彼を導きて、多難なる彼が魔鬼と戰ひて、遂に處世目出度其跡を修めたる至極面白き小説なり、請ふ一本を購求せられて家庭の知己を此書の内に撰び給ふべし。

定價 金貳拾錢
郵稅 金四錢

福羽美靜君序 鈴木弘恭君著

再版

文法口授

和本綴紙 定價金拾錢 郵便稅金貳錢

目次

(一)文と云もの、譯(二)章句段節の譯(三)文を作るは容易なる譯(四)多く文を作るを善とする譯(五)文を作る工夫の事(六)草稿の譯幷に書方(七)文を練磨する事(八)文を作るに病癖ある事(九)佳篇を作る法(十)文を培養する法(十一)種々の文例

四版

はゝのつとめ

皇后陛下御覧 三島通良君著

和本上製(上下二冊揃)定價金五拾錢郵稅金六錢

醫科大學產科◎婦人科◎小兒科○華族女學校◎長崎◎福岡◎島根◎秋田其他數縣尋常師範學校教科書及參考書

右は第三版賣切の所今般第四版、印刷成りたれば一層直段を引下候間續々御購讀あらんことを

東京麴町區下六番町六番地

女學雜誌社

史海

第廿四號目次

◉藤原時平……田口卯吉君

藤原時平が延喜の初に實行したる財政上の改革は從來史家の注目せざりし所なり、之に注目せずして單に「菅原天神記」に據りて時平を評するは非なり、

◉シルラ……桑原啓一君

シルラはシーザルと比肩すべき羅馬の大英雄なり、此篇其事蹟を記して詳かなり

◉往時英國宮中の敗德……桑撫流散史

歐人輙もすれば東洋諸國を斥して淫逸國と呼ぶ、此篇文明第一を以て誇る英國宮中の醜德を詳記し、一は以て彼等の自負心を摧き、一は以て世の中の鑑戒とす

◉柿本人麿……一果生

史海創立以來斯る名文なし、若し此筆法を以て其他に及ぼさば、何ぞ我史學の興起せざるを憂へん

◉考證◉眞正なる新井白石肖像◉神武天皇の正后伊須氣余理比賣は天孫人種と土人との間兒にましませり◉其他數件

◉批評欄内に於ては久米邦武、柏木貨一郎兩大人埼玉海の事に關して大爭論を始めたり

(定價)一冊金九錢。十冊前金七十五錢。市外は一冊に付郵稅二錢增◉每月一回發兌

發行所 東京京橋區彌左衛門町 經濟雜誌社

大取次 東京○東京堂、巖々堂、東海堂◉大阪○岡島新聞舗◉京都○便利堂

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

隔週 評論 發行

第七號要目

學者と云へる輩　巖本善治
蛙聲、旅心、朝貌。　北村透谷
にほはぬ花（小說）　田邊花圃
難波船（新躰詩）　磯貝雲峯
衝突論に於ける元良大西二君の衝突○經濟子の文學論○慶應義塾の經濟○○
山岡鐵舟、深草元政　評論子
誰か主相の賢こきに及ばん○對外道○福井城を愛しむ○南海布衣一平民○○
酒店改良新策　井上次郎
清水の次郎長　時事子
罪と罰を讀む　撫象子
福島中佐を歡迎す　巖本善治

本誌代價

六冊	前金	三十五錢	府外	三十八錢
十三冊（半年）	同	七十三錢	同	七十八錢
廿六冊（一年）	同	一圓三十錢	同	一圓四十三錢
一冊 金六錢	郵稅		金五厘	

產婆學講義附

產婆

毎月二回發行

定價 一部金拾二錢 郵稅金二錢 ／ 六部前金六拾錢 郵稅金拾二錢 ／ 爲替振出駒込郵便支局宛
見本として一部入用の方は郵便切手拾四錢送れ

◎講義は毎巻附錄とし文章平易にして初學生にも一讀了解し得べし◎叢話雜錄時事寄書等を載せたる產婆界唯一の師友たり◎一般世の夫人令嬢たるものゝ心得べき有益なる文字なり
◎自宅獨習者の爲め別に設けし方法あり第壹巻に記す

明治廿六年六月　東京市本鄉區駒込追分町七十一番地

發行所　東京產婆學講習所

明治廿六年四月廿五日內務省許可
明治廿七年七月七日印刷
明治廿七年七月八日發行

東京市麴町區下六番町六番地
發行兼編輯者　巖本善治
仝牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地
印刷者　根岸高光
東京市麴町區下六番町六番地
發行所　女學雜誌社
仝牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍工塲（電話十九番）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

評判

右は何れも今更申上る迄もなく効能著明の品にして御愛客諸彦より眞の玉揃ひとて御高評を賜り販路益擴く相成難有奉謝候此際彌調製を吟味仕候に付倚ほ此上御高評と共に續々御愛求之程希上候

發賣元
東京京橋區銀座一丁目
（つやふきん本舖）
佐々木玄兵衛
電話番號四百七十二

大販賣所大略

日本橋區米澤町一 五臓圓 大木
同區村松町 寶丹水本舖 岩涙
同區馬喰町一丁目 小町水 平尾
同區瀨戸物町 玉の艶本舖 玉置
同區元大坂町 淸心丹本舖 高木
同區本石町二 のみ取粉本舖 森谷
同區小網町四 氣轉丸本舖 黒澤
同區上槇町 萬金膏本舖 安川
同區本町四丁目 英藥本舖 松本
京橋區銀座二 精錡水本舖 岸田
同區銀座三 萬金丹本舖 ㊇松澤
下谷池の端仲町 寶丹本舖 守田
大坂市四ッ橋 本林丁字堂
名古屋市本町 土屋惣兵衛
仙臺市大町四丁目 高橋 藤七
箱館末廣町 ㋚●新田 太平

取次所は前記の外各地到る所高名藥舖賣藥舖和洋小間物店に有之候間御最寄にて御購求被下度候